

佛教学名誉教授

Kazuo Sekiyama

関山和夫

仏教は神道とともに、日本の文化に強い影響を及ぼしてきた。特に芸能の世界においては仏教信仰と庶民の「情念」が溶け合って流れており、能狂言や歌舞伎、文楽、落語、浪曲、講談などを深く楽しむためには、仏教への理解が欠かせない。関山和夫氏は浄土宗の寺に生まれ、日本芸能史の研究を通じて、埋もれた芸能の復活にも貢献してきた。特に布教師が節をつけて行う説教「節談説教」は「話芸」の源流であり、庶民の欠かせない楽しみでもあったという。笑わせ、泣かせながら仏法を伝えてきた伝統の「話芸」の魅力は、まさに「温故知新」。「情念を込めて論理的な話ができないわけではない」と、現代社会における「情念」の復活を訴える関山氏の話に、耳を傾けてみよう。

「情念で人は解放される」

仏教・芸能・生活が一体だった時代

——関山先生はもともと愛知県

のお寺のご出身だそうですね。

関山 江南市にある日輪山曼陀羅

寺・世尊院（浄土宗西山派）の寺

に生まれました。私は昭和四年生

まれで、一一歳の時に得度し、僧

籍を持っております。思うところ

があつて生家の寺を継ぐことはや

め、学問の道に入りましたが、仏

教から離れたわけではありません

ん。日本の芸能史を研究するため

には、仏教との関連性を考えるこ

とが欠かせないからです。

——「幼少のころは、曼陀羅寺

での縁日が楽しみだったとか。

関山 それはもう。嫁見祭、虫干

会、曼陀羅開帳、彼岸会など縁日

がたくさんあつて、お彼岸は春秋

それぞれ七日間も縁日となるんで

す。それだけ参詣人が多かったと

いうことですね。

縁日には必ず境内で見世物・の

ぞきからくり・芝居などが行われ

ましたし、露天商がずらりと並ん

で香具師の口上にもぎやかなもの

でしたよ。境内で一週間、サーカ

スがかかったことがあつたのを覚

えています。

堂内では説教があり、廊下や縁

側で「阿呆陀羅經」を口演する者

もおりました。もともと私は子供

でしたから、お説教よりも見世物

やサーカスの方に興味があつて、

困つてある幕の下をくぐつてあれ

これと見物したものです。子供に

とつては本当にわくわくするよう

な場所でした。

——今は、そのようなにぎわいは

失われたのですか？

関山 「藤まつり」の際には参詣

人が増えますけれども、私が子供のころとは比べようがありません。当時はそれだけ、仏教・生活・

芸能（娯楽・遊び）が一体となつた暮らしがいきいきと受け継がれていたのでしょうか。

「話芸」の源流は「説教」にある

——今も境内でイベントを行うお

寺は多いと思いますが、説教はわ

りとまじめと申しますか、芸能と

は縁遠くなつたようですね。都会

では仏教講座や勉強会が盛んに行

われていますけれども、教理をき

つちり学ぶような内容が多いと聞

いています。

関山 そういう講座はもちろんだ

切です。ただ、庶民が本当に仏教

を身近に感じたのは、よりわかり

やすく、芸能と一体化した「節談

説教」のようなものだったと思ひ

ます。またそれが、芸能にも大き

な影響を与えていたのです。

曼陀羅寺の隣に、浄土真宗の上

宮寺という大きなお寺がありまし

た。実は私は自分のところのお寺

よりも、こちらの方に興味を持つ

たんです。母が門徒（浄土真宗の

信者）の家から嫁いできましたか

ら、浄土宗の坊さんと一緒になつ

たとはいえ、御縁があつたんです

ね。そのお寺にはいろいろ説教

者の方がいらつしゃつて、節をつ

けて非常に上手に説教をされるん

です。笑い、泣きながらも、あり

がたい話にさしかかると、聞いて

いる人たちが一斉に数珠をまさぐ

りながら「南無阿弥陀仏」と「受

け念仏」を唱える声が、堂内に響

もすようでした。

——掛け合いいいますか、そこ

にちゃんとコミュニケーションが



平成 19 年、築地本願寺の「節談説教布教大会」でご講演される関山先生。本堂は開場とほぼ同時に満席となった(写真提供：株式会社方丈堂出版)。



あったのですね。ご幼少のころに聞いても、結構引き込まれるようなものだったんですか。

関山 結構どころか、すごく感動しました(笑)。何しろ、プロの芸能者顔負けのおもしろさなので。特に服部三智磨さんという説教者が有名で、この方は愛知県の寺の住職です。しかし、寺にいたのは大晦日と正月三が日ぐらい。あとは全国を行脚し、お説教して回るほどの大人気でした。

明治の末ごろ、服部さんが富山の高岡の寺に説教に行つたと

き、高岡には浪花節の桃とうちゅうげんくも中軒雲右衛門えもんも来ていたんです。関東浪曲の雄と言われた人でしたが、お客がほとんど来なかったそうです(笑)。みんな服部さんの方に行つてしまったから。もつともそのときは、同じ日に寺の行事もあつたとは思いますが。

——なぜそんな日にあえて興行をぶつけたのでしょうか。

関山 その時の興行師は当然知つていたと思いますが、あえて同じ日に組んだ。それだけ自信があつたんだと思いますよ。しかし、あ

えなく玉砕したわけです。

私はのちに「話芸」という言葉を仲間と造りました。

『広辞苑』の第三版ぐらいから載つたと思います。それ以前は掲載されていません。服部さんの節談説教は、まさに仏教の「話芸」でした。それまでの「話術」でいいじゃないかと

いう人もいたけれども。

——「話術」と「話芸」ではだいぶ感じが違つてしまいます。

関山 そうでしょう。それに「話芸」と言つた場合、それはどこか

日本の芸能の底流を流れている仏教

——三〇年以上前ですか、先生は、俳優の小沢昭一さんと一緒に、「節談説教」を上演して回られました。これはどういうことだったのでしょうか。

関山 それは小沢さんの慧眼けいがんなんです。「節談説教」に目を付けるところがあの人のすごさで、ほかの役者さんとの違いでしょうね。彼は放浪の芸能者に非常に興味を持って、廢れていく芸能を取材し、録音する仕事にも関わっていました。どんどん社会が近代化するにつれて衰退していく庶民の芸能が本当に大切なものをはらんでいたことに、ちゃんと気付いていたのだと思います。

小沢さんは私が発表した節談説教に関する研究に興味を持ってくださつて、のちに小沢さんや東京の真宗寺院生まれの永六輔さんら

ら出ているかということが問題なんです。それが「説教」からきているというのが僕の主張です。「昔話」からきているという学説もありますけれどね。

と、東京の岩波ホールで最初の「節談説教の会」を開きました。まず私が講演したのち、私が光榮にして台本を書かせていただいた親鸞聖人一代記「説教板敷山」を小沢さんがちゃんと袈裟けさをつけて実演、次に真宗大谷派の布教師ふくしだった故・祖父江省念せふえしやうねんさんが「忠臣蔵・寺岡平右衛門」を実演、永さん司会の座談会で終わるというプログラム。岩波ホールはそれほど収容人数が多くはありませんが、お客さんでいっぱいになってくれるかどうかとても心配したものです。ところがふたを開けてみたら超満員(笑)。

続いて名古屋、大阪、京都、福岡、岐阜、沼津などでも開催し、どこも大変な好評をいただきました。ずいぶん有名な作家や俳優さんも来てくださったんですよ。

小沢さんがこっそり客席の方をのぞいて、「いやあ偉い人が来ている。震えちゃうよ」なんて言っていました。舞台上上がっちゃったらやるしかしようがない。終わった後では袈裟を脱いで、柄杓(長い柄の先に笊がついているもの)を持って客席を歩きました、お布施を集めてまわりました(笑)。

——節談説教はただの芸能では

情念の解放を求める現代人

——仏教は日本の文化、とりわけ芸能の底流を流れ続けているのだと思います。しかし現代人はそういう感覚を失っています

で、芸能の楽しみ方も表層だけになっているかもしれません。どこかで「情念」を忘れているのではないかと思えます。

関山 それはおっしゃるとおりですね……。ある程度時代に合わせ変えていくのはしかたないと思います。明治以降、急速に「情念」が軽んじられるようになりまして。例えば説教にしても、今までのように節をつけてやっているようではキリスト教に太刀打ちで

なく、あくまでも「布教」だからですね(笑)。芸能ということでは嘶家さんなどもいらっちゃったのではないのでしょうか。

関山 たくさん来てくれました。亡くなった先代の林家正蔵師匠が「昔はこういう話芸からも学んだものだった」というようなことを言ってくれましたね。

きない、と排除されてしまいました。根拠のない非科学的なものだというわけです。

——以前は保護されていた仏教も自由競争の時代になり、強力な競争相手が入ってきて、なんとかしなければと考えたのも不思議ではありません。「向こうの方が文明は進んでいるらしい」という恐れもあつたでしょう。

関山 真宗教団の中にも批判勢力が現れました。外国へ行つて勉強してきて、サンスクリット語やパーリ語が読めず仏典の原典研究ができない者は、仏教を語る資格がないと主張する人間も出たほど

です。そんなことはいはずですけれどね。本当の意味で宗教を信じるためには、多少なりとも情念が入りこまなければならぬのです。頭で理解して、こういう法理だからこうなると言われれば、

確かにそうかもしれないけれど、庶民はついていけない。現代法話は情念に訴えるところが少ないために、閉塞感が起きているのだと思います。

——以前このコーナーで、リウマチ治療に笑いを取り入れているお医者さんにお話しいただいたことがあります。気楽に笑える落語を聞かせると、免疫力が向上して症状が軽くなるのだそうです。

関山 それはわかりますね。笑いや涙などの情念があつて、人間は解放されるものだから。理論系でも情念というか、感覚に訴える部分が必要ですよ。今、必要なのはそれだと思えます。情念を込めて論理的な話をしようと思えばできないことはないのです。

——最近はお寺で「節談説教の会

をすることもあるとか。

関山 平成十九年七月に東京の築地本願寺(浄土真宗本願寺派)で、現代の説教者七名による「節談説教布教大会」が開かれ、一般の老若男女が詰め掛けて大盛況でした。私はここでも講演をしました。私はここでも講演をしました。だが、本堂と間法ホール(もんぽう)の二カ所に分かれた会場のどちらも、開講のずいぶん前から満員となりました。

——現代人は情念を解放する場を求めているような気がします。

関山 そうですね。今後もこういう会が開かれる時には、ぜひ生の節談説教にふれてみてください。ずいぶん「説教」や「法話」のイメージが変わるし、仏教と「話芸」の豊かさを味わっていただけると思えます。





せきやま・かずお ● 1929年愛知県江南市生まれ。仏教芸能・話芸研究家。大谷大学文学部卒業後、県立高校の教諭・東海学園女子短期大学教授を経て、佛教学教授。同大学名誉教授。文学博士。「話芸」という言葉を広めた。2004年から京都西山短期大学学長。1964年『説教と話芸』で日本エッセイストクラブ賞受賞。1977年、話芸研究の業績で芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。1984年「話芸研究会“含笑長屋”落語を聴く会の主宰」に対し愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。国立劇場演芸場運営委員、愛知県文化財保護審議会委員、名古屋市文化財調査委員会委員などを歴任。名古屋芸能文化会顧問。ご著書に『説教の歴史的研究』『落語名人伝』など。

三遊亭圓朝の神髄は「禅」にあつた

——ところで、先生は噺家の方々とともに親交が深いようです。同じく仏教に通じる「話芸」の中で、読者がふれやすいものをいくつか、推薦していただけないでしょうか。

関山 落語、講談、浪曲などいろいろありますが、落語でしたら古典落語。そして笑いよりも人情話でしょうね。私が特に薦めたものは、本になりますが、三遊亭圓朝の「真景累ヶ淵」とか「怪談牡丹灯籠」です。ああいう噺は完全に仏教ですね。圓朝の場合は兄が禅僧で、小さいころからその人に教えられて仏教をたたき込ま

れました。自分でもずいぶん勉強しています。参禅し、四二歳で無舌居士という居士号（在家で禅の修行をする人の尊称）ももらっています。仏教、特に禅を勉強すると、さらに圓朝の噺は深く楽しめますよ。

——圓朝ほどの噺家で、「無舌」が居士号とは洒落していますね。

関山 そうでしょう（笑）。六二歳で亡くなるまで、二〇年間居士号を維持するのは大変なことだったと思います。現代の噺家さんを見ていてもいいですし、亡くなった六代目三遊亭圓生師匠や、先代の林家正蔵師匠たちまでは、圓朝時

代の色合いの中で教わり、演じています。だからまず間違はなく圓朝の心は伝わっているでしょう。録音が残っておりますので、聞いてみてください。

生で聞けなら、林家正蔵さんは師匠の正蔵さんの教えを忠実に守っていますので、明治の息吹を今日に伝えているんじゃないかと思えます。ほかにも、好みでいろいろな方を聞かれるといいですよ。浪曲や講談も若手が成長してきて、楽しみです。

——最近はお笑いブームと言われていて、あれも一種の話芸かもしれません。伝統的な大きな流れからはちよつと離れたところに、ただ若い人には受けていて、これだけ話芸が世の中に受け入れられている時代は久しぶりだと思えます。先生はどのようにご覧になりますか。

関山 率直に言えば、あまり好ましくない。若い人がやるものはそれほど面白く思えないんです。そういう時代なのだろうとは思いますが。

説教にしても、いろいろな歴史なり、知識なりに裏打ちされた、かなり深いところでのものだったと思います。ところが今の「お笑い」は非常に表面的になってしまいました。

関山 「漫才」という言葉を作ったのは吉本興業ですが、これは本来「万歳」でした。「三河万歳」とか「尾張万歳」などと、いろいろな流れがあつたけれど、いずれにしてもこれらは「予祝芸能」でした。農作物の豊穰や新しい年の幸いを願って、あらかじめ祝う芸能なのです。その中に道化万歳という部分があつて、太夫と才蔵が掛け合いで面白い事を言う。それが今の「漫才」の基礎となつたわけですね。ですから、「漫才」と「万歳」に込められているものの深さはずいぶん違っています。

——なるほど。仏教や神道など背景を知れば、日本の芸能の深さがわかり、もっとよく味わえるはずですね。本日はどうもありがとうございました。

——以前の「笑い」は、昔の節談

聞き手／日本銀行情報サービス局長 恵谷英雄